ザ・ターニングポイント

会社発展の契機となった転換点を紐解く

長きにわたる企業の歴史のなかにはいくつもの転換点があります。異分野への事業展開、新しい取引先の獲得、技術開発によるブレイクスルー、あるいは苦境から脱した契機など、現在の発展につながった各社の「ターニングポイント」を紹介します。（この連載では創業から半世紀以上の会員企業にフォーカスします）

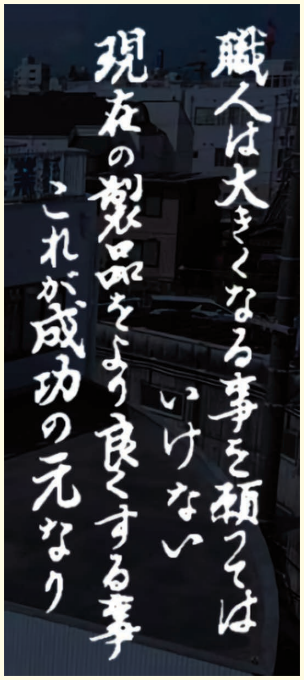
第3回　ナンカイ工業株式会社

織機部品製造からスタート

1920年、当時は日本の繊維産業が全盛期を迎える直前で、創業者・家治政一氏は、時代の要請に伴って、織機に使われる板ばねをつくる事業を始め、大阪市南区（現中央区）上本町に「南海スプリング製作所」の屋号で個人創業しました。

政一氏は、売り上げや利益を追求するのではなく、お客様を第一とし、質の高いものづくりを続けることが会社の発展に繋がると考え行動していました。将来にわたって企業活動の基調となる「経営理念」および職場活動の基本となる「行動指針」は、創業者の想いと創業以来の伝統を尊重し、今も大切に受け継がれています。

創業者　家治政一氏



創業者の遺訓 ▶
政一氏が亡くなる寸前、枕元にあった紙に自筆で書かれたもの。経営理念の根幹となっている。

Philosophy
経営理念

「品質と信頼性」を追求する事でお客様の要求に真摯に応え、事業を通じてより良い社会の形成に貢献します。

Guidelines
行動指針

安全第一	顧客第一主義
高品質の維持	技術革新
社員の能力発揮	社会貢献

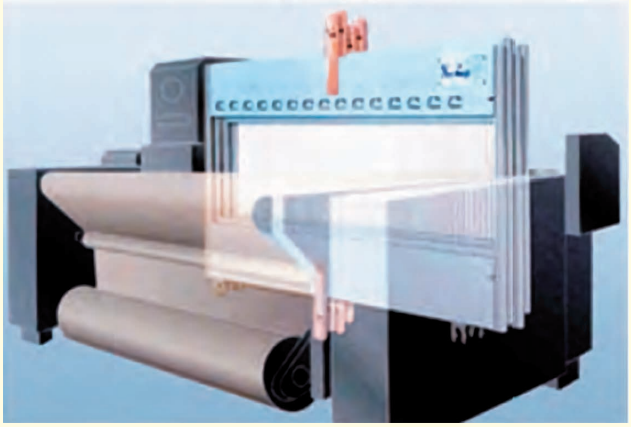
高速自動織機の中核部品「ヘルドフレーム」の開発で躍進

衣料品分野にとどまらず身近な生活で活躍する繊維製品。赤ちゃんを包む衣類やカーテンなどの布地、電子部品の基板や航空機の機体にいたるまで、いずれも糸を織って作られています。

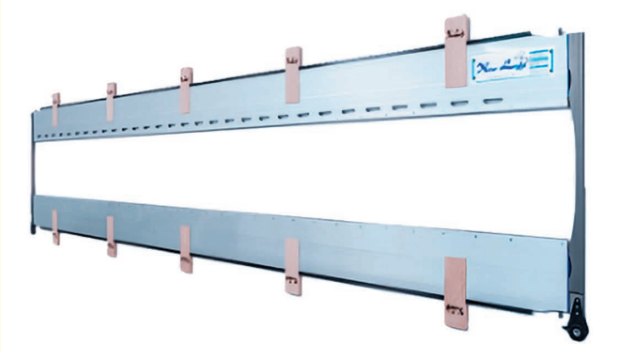
織物はたて糸とよこ糸で構成されており、織物を織りあげる機械を織機（しょっき）と呼びます。

織機の動きを簡単に説明すると、平行に並べられたたて糸が織機の後方から小さな孔の開いたヘルドと呼ばれる部品を通り、手前側に伸びてきます。ヘルドは『ヘルドフレーム』と呼ばれる長方形の枠に吊り下げられており、この『ヘルドフレーム』は

上下に往復運動を行います。これにより、たて糸は上に持ち上げられるものと下に下げられるものに分かれます。上下に分かれたたて糸の空間によこ糸を挿入し、筬（おさ）と呼ばれる部品でよこ糸を手前側に打ち込みます。これを繰り返すことで織物は生成されます。



自動織機の透視図



ヘルドフレーム

ヘルドフレームは織機1台につき2枚から多いものでは20枚使用され、厚みは約1cm、長さは1.5mから長いものになると10mを超えるものがあります。このヘルドフレームにはヘルドと呼ばれる細い部品が数千本も掛けられ、またそのヘルドには1本1本たて糸が通ります。

高速の織機では１分間に1,200回の昇降運動が繰り返される過酷な環境で使用されます。そのうえ世界の織物工場では24時間365日フル稼働しています。このような過酷な環境で使用されるヘルドフレームは、つねに強度、軽さ、耐久性などが求められます。それゆえ、ヘルドフレームは航空機部品よりも過酷な使用環境だと言われています。

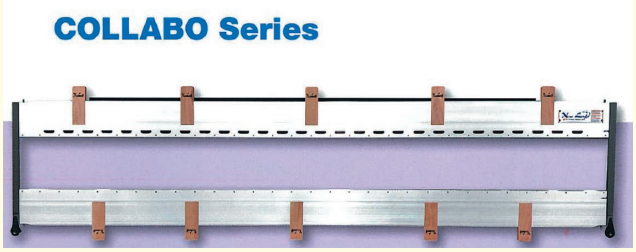
ヘルドフレームのオリジナルブランド「New Light」の開発

1957年にスチール製ヘルドフレームの製作を開始しました。自社で構想・設計をしたオリジナルの機械設備を積極的に導入し、創業以来培われてきた技術の結晶として完成したのが、ヘルドフレームのオリジナルブランド「New Light」です。1962年のことです。

「New Light」はさまざまな材質のパーツで構成されています。その一つ一つが安全性、強度、軽さ、耐久性、操作性、経済性を熱慮されたものです。また、どの部品も日本製です。「安全、品質、環境影響」といった、製造業に求められているすべてのことを集約した「日本のものづくり」の象徴と言えます。

現在では、国内シェアはもとより、中国、インド、パキスタンやヨーロッパを始めとする世界市場でもトップ水準のシェアを獲得し、世界的ブランドとしてグローバルな支持を得ています。

高速化、広幅化が進む繊維業界では、ヘルドフレームの軽量化と強度のアップは不可欠な条件と言えます。こうした条件を充たすために、開発の段階から素材の選定などの研究に取り組み、つねにユーザーの視点に立った発想と経験によって高められた技術力で、ハイクオリティな製品の開発を続けています。



航空宇宙分野で使用される超高性能 CFRP（炭素繊維強化プラスチック）を合成した新開発のヘルドフレーム。さらなる高速・高負荷環境での使用を可能にした。

Turning Point

将来を見据えた事業の多角化
建築用金物で活路を拓く

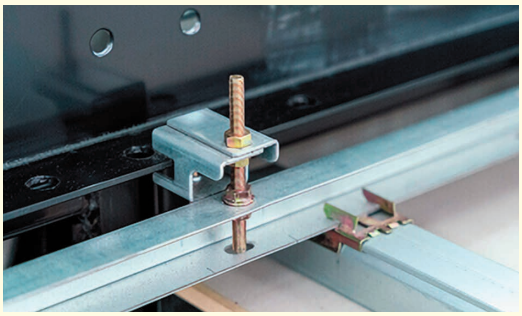
高度成長真っ只中であった1966年、日本の繊維産業は成熟期を迎えていたとはいえ、まだまだ隆盛の時代でした。しかし、将来を考えると「英国の繊維産業が日本にとって代わられたように、いずれ日本の繊維産業も東南アジアにとって代わられる」という先見的な判断から、早くから事業の多角化を模索していました。

織機部品に関する製造技術を応用して展開したのが、建築資材分野です。1966年、住宅の外壁をビスで固定していた大手ハウスメーカーに対して、ナンカイ工業が得意としていた板ばねを利用した「外壁取付金具」を提案しました。

その金具が施工効率を飛躍的に向上させるパーツとして採用されました。さらなるコスト削減、工期短縮が求められる建築現場において、取り付けが簡易で強度にも優れたナンカイ工業の金具は重宝され、建築資材部門は現在、売り上げの6割を占めるまでに拡大しています。

住まいづくりにとって最も大切なのは「安全」です。何よりもまず生命を守ることが快適な住空間の基本であり、生活の基盤です。

外壁のファスニング製品



天井下地のファスニング製品

建築資材事業のメイン商品は、住宅用の「高機能ファスニング部品」です。あらゆる部材を接合しながら、「耐える」「逃がす」「繋げる」などの追加機能を持った締結金具です。

地震時にロッキング機能を発揮する外壁免振取付金具、住宅を足元から支える基礎用の部品や、屋根を強風から守り強固に保持する金具、また内装部材をワンタッチで取り付ける下地製品など、ナンカイ工業の製品は日本中で広く使用されています。

ナンカイ工業の締結金具の優秀性が証明されたのが、阪神・淡路大震災でした。建物が倒壊しなかったことはもちろん、激しい揺れでも外壁に亀裂がほとんどなかったことから、地震にも強い金具としてさらに信頼を獲得することになったのです。

現在、この技術とノウハウは住宅分野だけでなく、工場やホテルといった大型建築物、ソーラーシステムやインフラの分野にも利用されるなど、新たなフィールドに展開しています。

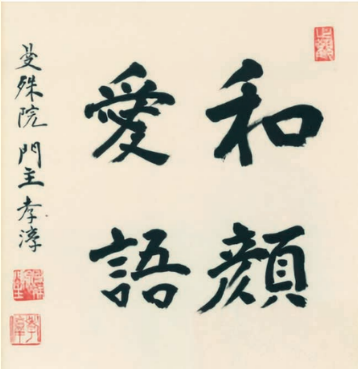
ナンカイ工業㈱へ社名変更

1970年には創業50周年を機に、社名を現在のナンカイ工業株式会社に変更しました。

2007年には貝塚工場を新設。専用機、半自動機と最新の設備が揃い、建築部品の主力工場として機能しています。さらに、2011年には山口工場、北陸工場を増設しました。

貝塚工場（大阪府貝塚市）

2020年3月、創業100周年を迎えました。冒頭に掲げた創業者の遺訓は、地道にこつこつ努力することの大切さを教えています。現代の慌ただしい情報社会にあっても、創業者のように日々の積み重ねを大事にし、人間らしく穏やかで優しい心を忘れずに接していくこと。まさに「和顔愛語」の心構えが企業永続の根本となり、次の100年に繋がると考え、社内にこの言葉が掲げられています。



“和顔愛語”（わげんあいご）は、禅語のひとつ。「和顔」はやさしげな顔つき、「愛語」は親愛の気持ちがこもった言葉を指し、穏やかで親しみやすい振る舞いのことを指す。

地域社会へ積極的な貢献活動

ナンカイ工業は行動指針の一つに掲げた「社会貢献」にも熱心に取り組んでいます。

これまでに地元の公的医療機関の支援、地域経済の支援、そして今年度は地域の子ども支援を目的として泉佐野市に毎年寄付を実施しています。

今年も４月に寄付贈呈式が行われ、泉佐野市長から感謝状が授与された。（前列右は同社会長 山岸彌平氏、左は社長 立川真敬氏。後列右から２人目が市長 千代松大耕氏）

また、従業員の募金により購入した文具類を従業員の手でラッピングして子ども食堂にクリスマスプレゼントとして贈呈するなど、地域社会の一員として従業員と会社が一体となった地域への貢献活動を行なっています。

次の100年を目指して

主力商品である繊維機械部品と建築資材部品は、ふだんは見えない部分で人々の暮らしを支える、「縁の下の力持ち」製品です。さまざまな機能と性能を付与しながら長い年月をかけて開発され、各業界で高く評価されています。

お客様のニーズが多様化、高度化し、ライフスタイルや環境も刻一刻と変わるなか、より一層の高付加価値製品の普及が望まれています。

100年以上の長きにわたり、ものづくりを通してより良い社会の実現に貢献してきたナンカイ工業。次の100年を見据え、創業者の想いを大切にしながら、お客様の期待を超える価値を創出し続け、世界の人々の暮らしに「なくてはならない企業」となるよう、スピード感と実行力をもって事業を展開しています。

本社工場全景（大阪府泉佐野市）

SNS ナンカイ工業 株式会社

<会社概要>

本社所在地	大阪府泉佐野市湊1-3-1
事業内容	建築用金具、繊維機械アクセサリーの製造
創業	1920（大正9）年3月
資本金	9,900万円
従業員数	250名（2023年3月現在）

同社ホームページにリンクします▶